

研究が防災につながる

日下部 実さん

富山大客員教授



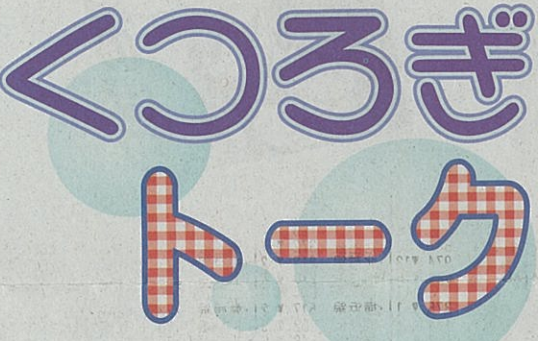
「湖水の二酸化炭素濃度が変化するのを見るのが楽しみです」と話す日下部実さん＝東京・汐留の共同通信社

〈1986年8月、西アフリカ・カメルーンのニオス湖からガスが噴き出し、周辺の村で約1800人の命を奪った。日本政府の国際緊急援助隊に加わって現地調査して以来、原因究明と再発防止、そのための人材育成と関わり続けている〉
それまで防災への関心は全然なかったんですよ。火山ガスが出て人が死んだというのが最初の情報。援助隊に専門家を入れることになり、学生のころ火山ガスを手掛けていた僕に声がかかった。
カメルーンなんて行ったことがなかったけれど二つ返事で引き受け、火山ガスを採る道具を準備したのに火山ガスの「か」の字もない。マグマからしみ出した二酸化炭素(CO₂)が湖の中にとまり、一気に噴き出したと後で分かりました。
帰国して研究費を申請し、調査を本格的に始めました。いろんな深さの水を分析したら、ガスがどんどんたまってくるのが分かってきた。ガ

カメルーンで災害援助活動

ス噴出のメカニズム解明などそこで成果が上がって、研究費が付いてまた行く。その繰り返しです。
防災のためだけというのでは続かないんですよ、僕らは…。研究ではなくなるから。研究の要素を残し、結果的にそれが防災につながるという事でないかね。災害防止だけなら僕らの出番は少ない。非常に新しいタイプの災害だったから出番があったんですよ。
〈2013年末、ニオス湖防災に取り組むカメルーン地質調査所から感謝状を贈られた。同調査所が大統領に授与されたトロフィーの複製も、ニオス湖の研究に関わった外国人の中で、ただ1人荣誉に浴した〉
大変うれしかった。地質調査所から4人の留学生を受け入れ、学位を取らせました。うちのかみさんも一緒に生活の面倒も見た。大丈

夫かなと思っていたら、農家のおばさんと仲良くなって野菜をもらったりして溶け込んでいましたね。
湖底近くの水中にたまったCO₂ガスを抜く費用をもらおうと国際協力機構(JICA)や外務省に通った。申請したのは2億円でしたが、JICAで「2億でも200億でも事務処理の手間は同じですよ」と言われたときは相当ショックだね。当時の大学の人間は1千万円を超すと、額が大きすぎてどうしていいかわからなかった。
カメルーン出身のサッカー選手パトリック・エムボマさんにも会いに行った。政府に働き掛けると約束してくれたけれど、うまくいかなかった。
結局、ガス抜き装置はフランスがつくった。11年からJICAと科学技術振興機構の共同プロジェクトでニオス湖と、やはりガスがたまって



聞き手・辻村達哉
写真・山下純司

くさかべ・みゆる 41年東京生まれ。専門は地球化学。東京教育大(現筑波大)理学部を卒業し、同大学院を経て富山大助教授、岡山大固体地球研究センター(現地球物質科学研究センター、鳥取県三朝町)教授などを歴任。現在は富山大名誉教授、富山大客員教授を務める。

いるマヌーン湖の災害防止や必要な人材育成をする事業が始まり、僕も黒子役で参加しています。
今年はいテック機器を使って、二つの湖の湖底を調べます。地形が分かると、ガスの濃度変化を具体的に議論できます。
マヌーン湖はガス抜きでほとんどガスがなくなったが、僕らの最近の調査で、またガスがたまり始めたことが分かり、昨年、太陽電池で動くガス抜き用ポンプを設置しました。ニオス湖も3、4年もすれば安全になると考えています。元住民が村に戻れるよう病院や学校をつくる動きがあります。でも彼らは何が起こったのか、いまだに分かっていない。説明のため講演行脚をしたらいいかなと思っています。
昨年は4回向こうに行きました。プロジェクトはあと2年余り。そこが身の引き時かな。